



今回は「高校生が語る飛騨の歴史」講座 の報告です。

◇ 吉城高校、斐太高校と連携し、飛騨の歴史を語る市民講座を開催しました！

日 時： 令和元年11月30日(土)

場 所： 飛騨市美術館

参加団体： 関高等学校地域研究部・文芸部 吉城高校地学部 斐太高校科学部

主 催： 飛騨市教育委員会

◇ 高校生による領域横断型郷土史探究セッション試み

吉城高校地学部の黒鉛入り縄文土器（沢式土器）の研究は、学校の裏山の沢遺跡（縄文早期）が研究の出発点。飛騨帯の露頭で黒鉛を採取し、土器成分との比較を試みた地道な研究です。1万年前からはじまった黒鉛利用。晩期にも再度利用されますが、謎はいまだ解明されていません。吉城高校地学部は、次年度日本考古学協会高校生ポスターセッションでの発表をめざし研究をすすめています。これからの研究に熱い注目が集まっています。

斐太高校科学部は、高山陣屋古文書を読み解きながら、安政年間の飛越大地震（1858）の被害を復元し、跡津川断層の活動との関わりに迫りました。科学部の生徒が丹念に文書を読み、活断層研究に役立terるとい画期的な業績です。この研究は今年度佐賀県で行われた全国総文祭において優秀賞を受賞しています。高校生が研究の最前線に立っているといっても過言ではありません。

関高校地域研究部と文芸部は共同調査を行い、作家であり考古学者でもあった江馬修（えまなかし）の生涯を追いました。さらには演劇部の力も借り、劇作家としての江馬の活動にもスポットを当てました。今年は江馬の生誕130年、江馬の代表作『山の民』のテーマとなった梅村騒動から150年。今回の研究が江馬の再評価につなげるよう、さらに研究を続けていく予定です。

この研究は、本年度の日本考古学協会高校生ポスターセッションにおいて最優秀賞に選ばれました。審査にあたった設楽博己氏（東京大学教授）より「最優秀賞に輝いた岐阜県立関高等学校の発表は、江馬修と八幡一郎双方の主張に対する客観的な評価にもとづきひだびと論争に対する学史的のいくつかの見解に批判を加えた内容で、堂々



たる論理の展開に感心しました。プロレタリア文学者としての江馬を文芸の視点から掘り下げた、異分野間の共同研究も新鮮でよかったです」との評価をいただきました（『季刊考古学』149 2019）。

◇ 参加した生徒の感想

今回の発表の中で、僕たちの研究が一般の人々にどのように受け止められているかということを発表を聞きに来てくださった人々の反応から感じることができた。高校生での座談会の際に質問してくださった方に対しては、納得していただけるような回答ができなかったのは心残りであったが、その一方で誇らしさやこれまで行ってきた研究の意義を感じることもできた。自分たちの研究に興味を持ってくださるといことが、自分にとってはこれまでの活動が認められ、報われたように感じた。また、研究・報告とは、ただ一方的に情報を発信していくという形では不十分で、受け取り手からの反応があつてこそ、意見交換などの形でさらに内容が深まっていき、より高いレベルのものになることができるのだと感じた。

今回学んだ研究への姿勢やその在り方などは、自分がこれからの道のなかで必ずためになると思うので、今後何かしらの研究や発表をする際に念頭に置きたい。

◇ 岐阜県の郷土史研究とふるさと教育、まちづくり

本年度より、県下の県立高校でもふるさと教育が一斉にはじまりました。「ふるさとに誇りを持ち、「清流の国」ぎふを担う子どもたちの育成」をコンセプトに始まった教育であり、郷土の歴史や文化を知り、その保全や活用を教育の分野においてめざすことも、ふるさと教育の主要な目標のひとつとされています。

とはいえ、高校の授業で郷土史を学ぶ機会は極めて少ないのが現状です。かつては盛んであった郷土研究系の部活動も全国的に低調で、全国都道府県のうち高文連地方組織があるのは13道県のみであり、本県ではわずかに5校が活動を続けている状態にあります。本県高文連地域研究部会では、こうした現状を改善するために、高文連地方組織による有志の大会を企画し、次年度8月の大会実施を予定しています。

この大会には、いわゆる郷土研究系部活動のみならず、自然科学部や文芸部といった他のジャンルの部活動による郷土研究や、高校生による地域貢献をめざした様々な活動報告などにも、広く参加を呼びかける予定です。

未来のまちづくり、ふるさと教育にとって、郷土の歴史を知ることは必要不可欠な学びです。地域の宝ともいふべき史跡や文化財、今も受け継がれている伝統的な芸能・産業などを再評価し、次世代へとつなぐためにも、高校生による歴史探究や、まちづくり提案における歴史遺産の活用研究を大いに進めていくべきであると考えます。

関高等学校地域研究部では、校内の文芸部や放送部、演劇部といった様々な部活動との連携、他校や行政機関との交流を深めながら、今回の歴史講座のような啓発活動が続けていきます。

